「子ども理解を考える」
―― 講演活動実践報告 ――

藤　井　房　雄

Considering a better way to understand children
―― Lecture report ――

by
Fusao Fujii

要旨

本稿は、2009年から地域貢献として取り組んできた講演活動の内容を取りまとめたものである。

講演等の内容は、生徒指導担当時代の実際の指導の中で学んだことや各種研修会等で学んだことを基に、子ども達の指導に欠くことのできない「子ども理解」について、大きく「子ども達を取り巻く社会背景」、「子ども達の置かれている立場」、「子ども理解での配慮点」、「実際の指導での配慮点」、「指導者としての姿勢」の５つの視点から構成した。

経験に基づいた内容が多く、専門的な裏付けが十分無い極めて稚拙な内容であるが、ここに紹介し多くの方の指導を仰ぎたい。

なお、対象者が多様である関係から、専門的な用語は極力避け誰もが理解できるように配慮した。

キーワード：子ども理解、思春期、指導

1　はじめに

現在、学校教育や家庭教育において子ども達への指導の難しさが叫ばれている。発達段階それぞれにおいて指導の難しさはあるが、その中で特に難しい時代と言われているのが中学生時代である。

その原因について多様な意見が述べられているが、残念ながら諸問題全てを一気に解決するだけの具体的・効果的な対応策というものは見つからない。

種々の機会に子ども達の指導について話し合う機会があるが、たどり着く先はいつも「温か

い心と思いやりの心」での「子ども理解」に落ち着く。

筆者は、中学校勤務時代、また地方教育委員会（以下「地教委」と記す）勤務時代をとおして長く生徒指導に携わってきた関係からか、多くの団体等から依頼を受け講演等に取り組んできた。

主な団体等は以下のとおりである。

- 国立大学法人山口大学（教員免許状更新講習会）
- 山口県教育委員会（養護教諭初任者研修会）
- 下関市教育委員会（指導主事研修会・小中生徒指導主任研修会等）
- 山口県内地教委（小・中学校生徒指導主任研修会）
- 下関市青少年健全育成市民会議（教育講演会）
- 下関市内各地区青少年健全育成協議会（教育講演会）
- 下関市内小・中学校ＰＴＡ（講演会）
- 山口県内中学校（教育講演会）
- 下関市内中学校（教育講演会）
- 山口県内中学校（校内生徒指導研修会）

「時泥棒は返済不能な十両の罪」

これは、江戸時代にあった言葉だそうだ。

「時間を守れ」「約束無しに訪問するな」「無駄話をするな」など、他者の時間を費やすことはするなという戒めの言葉だという。

この実践報告が時泥棒にならないことを祈っている。

2　子ども達は今

「今の子ども達は～」とか「最近の子ども達は～」という言葉をよく耳にする。

確かに、「今の子ども達は～」と言いたい気持ちも理解できなくはないが、この言葉は責任を子ども達に負わせる大人の身勝手であり、子ども達を育ててきた大人の責任として現実を真摯に受け止め指導の在り方を本当に考えなければならない時ではないだろうか。決して、子ども達のせいだけではない。

まず、ここでは、今の子ども達がどのような社会の中で育っているかについて述べてみたい。

2・1　社会背景

2・1・1　社会の急激な変化

社会の多面にわたる急激な変化により、大人も子ども達もその変化に対応できなくなっている状況がある。その影響は、子ども達に対してはもちろんのこと、指導の営みに取り組む大人への影響の方がより大きい。

例を挙げると

- 情報化社会　　～　情報の氾濫（東京も田舎も同じ）
- 少子高齢化社会　～　家庭の中に子ども社会が存在しない
- 核家族化
- 学歴偏重主義
- 総中流家庭意識

などが挙げられる。

これを引き起こした原因を考えてみると次のようなことが考えられる。

戦後の高度経済成長期		高度経済成長後
・追いつけ追い越せ ・自己犠牲 ・協調的 ・滅私奉公 ・均一化	⇨	・無目的 ・自己犠牲の拒否 ・自己中心 ・滅公活私 ・格差化

戦後の高度経済成長期、国の再興という国民共通の目標に向かい経済成長に取り組んだ。そこには、多面において均一化が図られ滅私奉公という自己犠牲が伴った。しかし、高度成長を遂げた後には無目的となり自己犠牲の考えは姿を消した。このことは、生活の中心が「社会」から「自己」に移り変わったことを表しており、大人の価値観の変化に大きな影響を与えた。また、地域社会の変化や現在よく言われる地域の教育力の低下、更には人間関係の希薄化にも結びついていると考えられる。

規範意識の低下もこの社会変化の産物と言える。

昔、親が「風が悪い！」という言葉をよく使い、「近所の人には挨拶しなさいよ。人に迷惑をかけなさんなよ。でないと風が悪いよ。」と、一歩家を出たときの態度を子ども達に厳しく指導した。つまり、社会が広がれば広がるほど他者に対する気配りの必要性を教え込んでいた。

現在はどうであろうか？

社会変化に伴い、生活の中心が「自己」中心になり、自分に迷惑を及ぼさない限り問題として

受け止めない。ましてや、他人の家の子どもについては他人のことであるといった風潮が生まれ、人間関係の希薄化に拍車をかけ社会の規範意識の低下を招く結果となった。

このように、社会変化に伴い変化した大人の価値観が子ども達の価値観として定着してきている現実をまず理解し、今の子ども達がこうした社会の中に育っていることを念頭に置いて指導に当たることが大切であると考える。

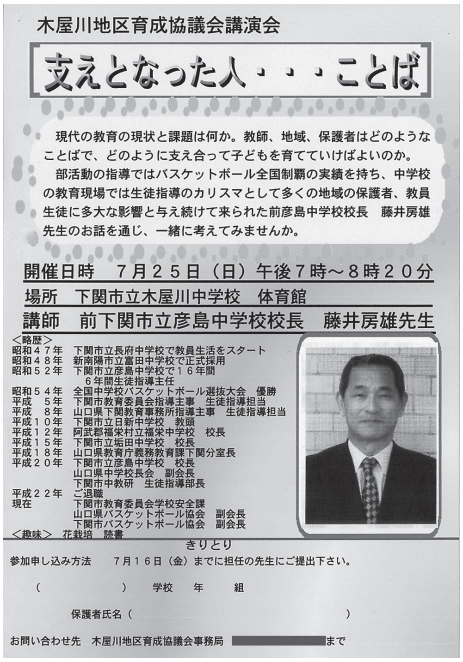
2・1・2　一億総教育評論家時代

高学歴社会になり、子ども達の教育に携わる教員を「指導者」として見ず、学歴や経済的な面で判断する傾向がある。

ある小学校で、児童が校長に「校長先生はお父さんより頭が悪いんだね。」と真顔で話しかけたという。

学歴や経済力で人に優劣をつける親の姿勢が知らず知らずの間に子どもに影響を及ぼし、子どもにとって「指導者」という存在を極めて薄くさせていることを物語っている一例である。

また、インターネット等の普及に伴い、教育に関する情報が容易に手に入り誰もが思ったことを論じることのできる時代であることから、得た情報を完璧なものとして捉え、うまくいかない場合は情報で得た理論に照らし合わせ現実を批判する傾向がある。


木屋川地区育成協議会講演会

支えとなった人・・・ことば

現代の教育の現状と課題は何か。教師、地域、保護者はどのようなことばで、どのように支え合って子どもを育てていけばよいのか。
部活動の指導ではバスケットボール全国制覇の実績を持ち、中学校の教育現場では生徒指導のカリスマとして多くの地域の保護者、教員生徒に多大な影響と与え続けて来られた前彦島中学校校長　藤井房雄先生のお話を通じ、一緒に考えてみませんか。

開催日時　７月２５日（日）午後７時～８時２０分
場所　下関市立木屋川中学校　体育館
講師　前下関市立彦島中学校校長　藤井房雄先生

＜略歴＞
昭和４７年　下関市立長府中学校で教員生活をスタート
昭和４８年　新南陽市立富田中学校で正式採用
昭和５２年　下関市立彦島中学校で１６年間
　　６年間生徒指導主任
昭和５４年　全国中学校バスケットボール選抜大会　優勝
平成　５年　下関市教育委員会指導主事　生徒指導担当
平成　８年　山口県下関教育事務所指導主事　生徒指導担当
平成１０年　下関市立日新中学校　教頭
平成１２年　阿武郡福栄村立福栄中学校　校長
平成１５年　下関市立垢田中学校　校長
平成１８年　山口県教育庁教務教育課下関分室長
平成２０年　下関市立彦島中学校　校長
　　山口県中学校長会　副会長
　　下関市中教研　生徒指導部長
平成２２年　ご退職
現在　　下関市教育委員会学校安全課
　　山口県バスケットボール協会　副会長
　　下関市バスケットボール協会　副会長
＜趣味＞　花栽培　陸書

きりとり

参加申し込み方法　　７月１６日（金）までに担任の先生にご提出下さい。

（　　）　学校　年　組

保護者氏名（　　）

お問い合わせ先　木屋川地区育成協議会事務局　[redacted]まで

（木屋川地区育成協議会講演会案内）

こうした現状の原因とまでは言わないが、影響と言えるものにマスコミがある。「ムカつく」「キレる」という言葉を不快感のストレートな表現として市民権を得た言葉にした。

「今の子ども達は、学校にがんじがらめにされてストレスが多く、ムカつくのもキレるのも当然」と評論し、さらにひどい場合は、ムカつきキレるのが人間的であるとか進歩的であるとまで言い切る場合もある。

したがって、マスコミの論評を情報として受け止めた親は、「ムカついたりキレたりするのは当然である」、「反発行為は当然である」、「学校・社会のせいである」と受け止め、子ども達が自らを律することには目を向けず、社会、学校、指導者を批判する傾向にある。

また、マスコミのさも当然とした論評が子ども達の甘えと自己中心的なものの考え方を助長し、悪しき風潮となっているのも事実であろう。

3　子ども達の置かれている立場

子ども達は、心身ともに各発達段階に応じた変化を見せながら成長している。

ここでは、その変化が特に著しい中学生期について考えてみたい。

3・1　思春期を考える

小学生期の後半から中学生期に入る頃、「最近この子が変わった！」と感じることがある。

子どもの変化に親は戸惑い、不安に感じたりイライラしたり腹立たしく感じたりする。

子どもは、親のこの態度に敏感に反応した言動を取り、親はますます子どもが分からなくなる。

「変わる」「変わった」ということは、自分の中に作られていた観念に矛盾を感じ、大人が与えた枠を自分の力で破ってみたいと考えるあこがれの表れであると捉えたい。つまり、自己を自分の力で形成しようとする時期を迎えた、いわば思春期への突入である。

よく、言動を理性的であるか衝動的であるかで判断するが、

○　幼児期　　理　性　＞　衝　動
○　思春期　　理　性　＜　衝　動
○　大　人　　理　性　＞　衝　動

という式が成り立つと言える。

幼児期においては、親の指導を忠実に守ろうとすることから、理性的に判断する。

「お母さん！あんなことをしたらいけないのよね。」という言葉がこのことを物語っており、判断とはいっても子ども本人の判断力でなく、親から教え込まれた理性での判断である。

思春期においては、前述のとおり、自分の中に作られていた観念に矛盾を感じ、大人が与えた枠を自分の力で破ろうとすることへのあこがれから、大人の干渉を嫌い、自分の頭で分かっていても素直に言動に表すことができず、その結果衝動的言動が見られるようになる。そして、大人になると種々の経験を通しての学びから再び理性的に物事に対処できるようになる。

子ども達は、日々変容し成長しているにもかかわらず、指導する側の大人はその成長に気付かず、いつも同じ「この子」として指導しているケースは少なくない。大人の小言がよい例である。

思春期の特徴としては、

○　大人への反抗・反発
○　自己中心的 (自分愛・友人愛)
○　心理的幼稚化（幼な返り）

が挙げられる。

ここでは、大人への反抗、反発について述べてみたい。

先ず顕著なのは、大人・親、学校で言えば教員の干渉を嫌うことである。

大人は、長い社会生活の経験から理性を働かせ理屈で物を考える。特に子どもと話すときは理屈っぽく、白・黒をはっきりさせようとする。しかし、子どもの心の中には、「分かっている。でも……。」というグレーの部分が存在する。

自己との戦いの中にあり、しかもうまくいかないときだけに、大人の気遣いや親切を監視・指示・束縛と受け止め、反抗・反発するしか対応策が取れずにいる。しかし、そこには今まで大人から与えられた枠というものを超えてみたいという思いがあり、その表れが屁理屈として出てくる。

こうした状況下にありながら、勉強・友人・先生・将来・家庭等諸々のものがさらに追い討ちをかけ、日々子ども達の心をゆさぶっているという現状がある。

大人がいくら「私だったら」とか「先生だったら」と言っても、それは大人の経験を通しての考えであり、本当に同年代の子ども達の考え方として話しているものとは違うのではなかろうか。

子ども達は、揺れ動く心で必死に考え行動をとっている。したがって一過性の逸脱行動が発生しても決しておかしくはない。

思春期に直面する様々な出来事は、大人にとって大したことでなくても子ども達にとっては大変なことであり、大人は、子ども達がこうした状況の中に置かれていることを理解する必要があろう。

4　子ども理解（児童生徒理解）

4. 1　子ども理解の重要性

人はとかく「敵」か「味方」で相手を判断し、その判断基準は「話を聞いてもらえるかどうか、また、再び話をしたいかどうか」にあるといえる。

理解してくれる人には安心して心を開き、そうでない人には拒否的になり心を閉ざす。

このことは子ども達に限らず大人も同様である。

子ども達への指導は子ども達の人格の完成を目的に行うもので、指導する営みに携わる大人

と学ぶ営みに携わる子ども達との間に人間関係ができていなければ、指導の成果は望めない。この人間関係構築の基盤となるものが「子ども理解」である。

平成２３年度　下関市小・中学校フォローアップ研修
藤井房雄先生の講話を聴いて感じたこと　　下関市立[redacted]小学校 [redacted]

藤井先生の講話を聴き、子どもたちと関わることがその子の人生に大きく関わるという教員の責任の重さと、子どもとの出会いが自分自身の人生を豊かにする尊さに気づかされた。それに当たって、今度私が子どもたちへの接し方において、意識していくことを下記の３点にまとめた。

① 継続的な児童理解を図る

担任として子どもと毎日接していると、その子どものことをなんでも分かっているという自信がでることがある。その内に「あの子はこう考えるだろう。」「あの子は大丈夫。」そんな決めつけを行ってしまう。しかし、人の心は見えるものではないし、人の言葉と心の中は違うことがある。この前提を忘れ、「分かっている。」と考えることをやめることは、理解をしようとしないことになる。その子を完全に「分かる」ことは不可能であるということを基礎に置き、「分かりたい」と思考錯誤することを続けていく姿勢をとっていこうと思う。

② 「聞き上手」な人となる

私は「教員はおしゃべりである。」という言葉にまさに合致している。「教員だから」ではなく小さいころからそうだった。特に子どもという時期は自己中心的なので、自分の話をすることが多い。小学生低学年と話をすると一生けん命に話してくるので、それを「聞くこと」は体力がいると感じる。しかし聞いてあげたときの子どものうれしそうな顔は本当にかわいいものである。「聞き上手」な人の包容力や魅力は実生活からも百も承知であるので、これまでも人から話を聞こうと意識をしたり、話を相手に広げたりしてはきた。今後はただ聞くだけでなく、「この先生には悩みを話したいな。」と思わせるようなやさしい話し方を研究していく。

③ 「ほめ上手」な人となる

人間の欲求として「ほめられたい」ということがとても大きいし、とても大切なことである。ましてや子どものその傾向が強いであろう。しかも「先生からほめられる」という効果は大きい。私はこの立場を存分に利用してほめようと思う。その子がほめられてうれしくなることに気づき、伝えられる思いやりを大切にしていきたい。

「他人の身に心を置く」大切さは、人生を通してとても大切だと思う。それができる人は魅力的だし、周りに一緒にいたいと思われる。その存在自体で子どもたちが学び、人の気持ちを察せられるようになるだろうか。「意識する」ことと自分が成長させてもらえるありがたさを心においた姿勢で保っていこうと思う。

藤井先生、熱い講話を聴かせていただき本当にありがとうございました。

（研修会参加者感想文）

4・2　子ども理解の留意点

4・2・1　大人自らが自分を見つめ直す

相手を理解しようとするならば、そこに好ましい人間関係がなければ理解は困難である。このことは前述のとおりであり、人間関係ができていなければ特に子ども達は本当の姿は見せない。

子ども理解に際して、子どもだからという思いや大人だからという変なおごりがあっては、子ども達を理解することは困難である。

まずは大人自らが、同じ時代を共に生きる仲間として子ども達をとらえ、謙虚な姿勢で子ども達の目線に立って子ども理解に努めることが重要ではないだろうか。

そうしたとき、子ども達を見る目が変わり、子ども理解がよりできるようになるのではなかろうか。

4・2・2 「分かっている」は分かろうとしないこと

大人の会話の中で、「あの子はこんな子だった。」、「あの子のことは私が一番良く知っている。」「そういえば兄ちゃんもそうだった。」というような言葉を耳にすることがある。

この言葉が出たとき、その子に対する理解は終わる。

子ども達は常に成長し日一日と変わっている。そうした中、一時的な子どもの言動でその子を決め付けてしまっては、その子を理解することはできない。常に、「今日はどうだろうか？」、「今はどうだろうか？」の視点で見ると、わずかな変化に気付き、その子の理解が深まる。このことが、よく言われる子ども理解に際しての“研ぎ澄まされた感性”というものであろう。

時には、子どもが生まれてきたときの「元気に生まれてきてくれてありがとう！」の親の気持ちに立ち返り、大きな心で子ども理解に取り組むことも必要であろう。

4・2・3　話し上手は聞き上手

子ども達と接し、外見だけでその子を理解することは極めて困難であり、逆に危険な面がある。接する中で初めて分かることの方が多い。しかし、大人は、話し上手ではあっても往々にして聞くことが苦手で、一般的に多弁、その上すぐに自分の考えを述べ同意を求める傾向がある。また、戸締め言葉を使うケースも多い。

学校の教育相談でよく使われる言葉に“受容”と“共感”と言う言葉があるが、これは教育相談活動のみに限らず日々の子ども達とのかかわり全ての場において指導者に求められる姿勢である。

この姿勢をもとに子ども達とコミュニケーションを図っていくことが、子ども理解に大きく役立つ。

併せて、言葉や言葉遣いに配慮することが大切である。

また、足りないものを補うものが言葉と言われ、子ども理解においては、表情・態度や心遣いが言葉以上の成果を生み出すことが多い。

逆に、伝えてこそ言葉とも言われる。後になって『そんなつもりは無かったのに……。』というケースもよくあり、状況に応じては言葉で伝えることが必要なケースもある。

いずれにしても、表情・態度は心の現れであり、言葉遣いは心遣いといえる。

子ども達は、大人の表情・態度や言葉・言葉遣い一つひとつに敏感に反応し、それに応じた言動をとっている。大人の気配りや心遣いが感じられなければ心を開くことはない。

子ども達が心を開かない限り子ども達の理解はできない。

5　実際の指導に当たって

子ども達への指導をとおして種々の課題や悩みが生じることが多々ある。その際、原因を子ども達のせいにしていることが多い。

ここでは、実際の指導に際して大人自身が配慮すべき点について述べてみたい。

5・1　褒めることの大切さ

褒められて嫌な思いをすることはない。これは子どもに限らず大人も同じである。

「褒められる」ことにより自己承認欲求が満たされ、自己肯定感が向上する。

自己肯定感の形成は、幼少期の生活・教育環境によって大きく左右されると考えられ、自己肯定感が高ければ心の受容が大きく、物事に対して意欲的になる。特に人間関係の構築には欠くことができず、教育上の重要な要素だと考えられている。

物事への意欲は、その後の主体的取組につながり、取組の中での達成感・成就感をとおして

さらに自己肯定感を高めていく。

人生には二大喜びがあるという。

① 認められる喜び　＝　褒められる。

② 自己実現の喜び　＝　体験をとおして物事が成就する。

この二つの喜びを感じたとき「自ら自分を認めることができる」という人生最大の喜びが得られるという。

このことからも「褒められる」ことは人間形成において非常に大きな影響力を持っていることがわかる。

また、「褒められて育った子どもは褒めることのできる大人になる。怒鳴って育てられた子どもは怒鳴る大人になる。」という言葉を聞いたことがある。

僅か一言の褒め言葉が、子ども達のその後のより良い成長に大きな影響を与えると考えるならば、たとえ子どもが調子に乗っても大いに褒めるべきであろう。

5・2　出来なくて当たり前

指導したことがその後子ども達に定着し確実にできるようになれば、指導の営みに携わる側としては何の苦労もない。しかし、現実には指導前と同様のことが繰り返されることが多い。

とかく大人は、指導したことは「出来て当たり前」「出来るのが当たり前」と思い指導に当たる。その結果小言が多くなったり腹が立ったりし、時には子ども達の人間性を否定するような思いを持ってしまうことも無くはない。

指導の結果が気になることはもちろんであるが、大切なことは「指導をし続ける」という姿勢であろう。

場合によっては、指導が非常に困難なケースもあるが、理性的に物事に対処できる大人として根気強く継続して指導に当たることが子ども達の心を開くことに繋がる。

指導をし続けることは、決して難しいことではなく、誰もが出来ることでもある。

5・3　螺旋階段を昇る

「できなくて当たり前、だから指導をし続ける」という考えに立てば、次には指導方法を考える必要が生じる。

指導方法は、子ども達にとってわかりやすく、また大人にとってもわかりやすいものが望ましい。

螺旋階段を昇ると周りの風景が変わりながらも同じ風景が繰り返される。つまり、それぞれ

の風景に応じた指導内容を設定し、機に応じて巻き返し繰り返し指導することが螺旋階段を昇ることになる。このことは、指導内容の明確化に繋がり、子ども達への定着に効果的である。

同じ内容を継続して指導することも大切ではあるが、マンネリ化が生じやすく費やした労力ほどの成果が期待できないことが多い。むしろ目先を変える方が期待大である。

併せて、指導結果の検証についても考えておく必要がある。指導内容に応じた検証方法、検証時期等も指導方法の検討時に考えておく必要がある。

6　人間的な成長を目指して

子ども達が日々成長を続ける中、指導の営みに携わる大人の成長も欠くことができない。

ここでは、子ども達に関わっていくために大人としてどうあるべきかについて述べてみたい。

6・1　同一視

同一視とは、他者の諸特性を自己のものとし、それに従って変容する心理的過程をいい、憧れる人の身振り・口ぶりに似たことをすれば、その人と同じ力量と幸せを自分も持つことができると考える、人格を形成する上での基本的機制である。

同一視で人が変わっていく。大人の生き様が子ども達に映り子ども達が変わっていく。そう考えれば、子ども達の一番身近にいて指導に携わる大人が、十分な人間性を身につけた同一視の対象として存在することが望まれる。

なぜなら、子ども達が常に同一視の対象を求めていることも考えられるからである。

7　終わりに

子ども達の指導にマニュアルはいらない
思いやりの心と温かい心があれば
その心の表れが言葉や態度となって表れ
子ども達は健やかに育っていく
子ども達の指導にマニュアルはいらない

これは、長期間子ども達の指導（児童生徒指導）に携わってきて自分なりに出した結論である。

もちろん、複雑多様化する諸問題の解決には、個々の問題に応じたきめ細かな対応策が不可欠であることは否定しない。しかし、それ以上に大切なことは、指導に携わる大人が、どのような姿勢・態度で子ども理解に努めるかという基本的な構えにあり、その点に視点を当て内容を構成した。

本稿で紹介した内容は、前述のとおり、これまでの講演活動の中の子ども理解に関する内容の一部であり、学校現場での経験とその間学んできた知識のみで学術的裏付けが十分あるわけではないが、子ども達の指導に関わる方々に少しでも役立っていれば嬉しい限りである。

講演活動は、ややもすると我流理論の押し付けになりかねない。

今後は、経験の学術的裏付けに取り組み、より役立つ講演活動に取り組む所存である。

なお、ここで紹介した講演等の内容については、金平敬之助氏（当時スミセイリース会長）及び森田洋司氏（当時大阪市立大学教授）の講演内容を主たる資料としていることを申し添える。

注）参考資料

(1)　金平敬之助：　基調講演（平成５年度　文部省主催行事）

(2)　森田　洋司：　講義（平成５年度　文部省主催行事）

講演（平成６年度　下関市教育祭）